

第29回PFFスカラシップ作品

『恋脳Experiment』お披露目

World Premiere Screening

PFFスカラシップは、1984年に「8ミリ自主映画の監督が16ミリ長編をプロのスタッフと共につくると何が起きるか?」という挑戦として始まりました。以来、入選監督のオリジナル企画を製作から公開までトータルでプロデュースするプロジェクトとして継続しています。今年は『Journey to the 母性の目覚め』でPFFアワード2021審査員特別賞を受賞した岡田詩歌監督の新作をお披露目します。

初めのお客様となる皆さんへ



この作品のテーマは〈恋愛にまつわる呪い〉です。私たちは、恋愛をしなければならぬという強迫観念に囚われやすい社会を生活しているように感じます。本来恋愛は、してもなくてもいいはずのものです。しかしドラマや漫画、映画などあらゆるメディアが、恋愛をすることを当たり前のように描いているように感じます。また、恋人がいる状態や他者から好意を寄せられることが一種のステータスとなり、その先には結婚というゴールがあるとされ、結婚しても子どもはいつ持つのかなど周囲の人間から日常的に問われもします。そもそも婚姻という制度自体が全ての人が望むような形になっていないのに、なぜ恋愛…特に異性愛を持てはやし、自然なものとする社会なのでしょう。

よく「恋をすれば可愛くなれる」という言葉を聞きます。私が初めてその言葉を聞いたのは、小学校低学年の頃です。それほど幼い頃



PFF Scholarship Films 1985-2022 これまでPFFスカラシップ作品

1 『いみてーしょん、インテリア。』

1985年/カラー/45分/16mm
監督・脚本：風間志織

2 『はいかぶり姫物語』

1986年/カラー/100分/16mm
監督：斎藤久志 脚本：斎藤久志、福島啓子

3 『バス』

1987年/カラー/80分/16mm
監督・脚本：小松隆志

4 『自転車吐息』

1989年/カラー/93分/16mm
監督：園子温 脚本：園子温、斎藤久志

5 『大いなる学生』

1991年/カラー/50分/16mm
監督・脚本：小池隆

6 『二十才の微熱』

1992年/カラー/114分/16mm
監督・脚本：橋口亮輔

7 『裸足のピクニック』

1992年/カラー/92分/16mm
監督・脚本：矢口史靖
脚本：鈴木卓爾、中川泰伸、矢口史靖

8 『この窓は君のもの』

1993年/カラー/103分/16mm
監督・脚本：古厩智之

9 『タイムレス メロディ』

1999年/カラー/95分/video
監督・脚本：奥原浩志

10 『空の穴』

2001年/カラー/127分/35mm
監督：熊切和嘉 脚本：熊切和嘉、穂月彦

11 『IKKA：一和』

2002年/カラー/75分/35mm
監督：川合晃 脚本：川合晃、青木豪

12 『BORDER LINE』

2002年/カラー/118分/35mm
監督：李相日 脚本：李相日、松浦本

世界初上映

『恋脳 Experiment』

2023年/カラー/110分予定

ゲスト: 岡田詩歌 (映画監督)、
 湊 キララ (俳優)、平井亜門 (俳優)、中島 歩 (俳優)

🕒 9.15 18:30~

監督: 岡田詩歌 / 脚本: 岡田詩歌、岡田和音 / 撮影: 熊倉良徳
 美術: 井上心平、園部陽一郎 / アニメーション: 岡田詩歌、農場 / 音楽: 糸井 塔
 出演: 湊 キララ、平井亜門、中島 歩



©2023 ぴあ、ホリプロ、電通、博報堂DYメディアパートナーズ、一般社団法人PFF

から、恋をしななければならない、可愛くなければならない、という考えを私たちは植え付けられています。本作では、そういった恋愛にまつわる強迫観念を「呪い」と定義しました。本作で描く「呪い」は単に恋愛だけでなく「恋をすれば可愛くなれる」のような、恋愛を中心とした様々な固定概念による呪いも内包しています。

本作は実写とアニメーションを用いて、人生で直面する多様な呪いに、主人公の山田仕草とその周囲の人々がどのように向き合っていくのかを描いています。仕草は幼い頃から、絵本やおままごとで、異性を愛することがさも自然なことのように刷り込まれて育ちます。成長した仕草は初めは可愛くなりたい、という理由だけで異性と恋愛を試みますが、うまくいかずにその経験を糧に新たな一歩を進みます。最終的に、仕草はどのように呪いと付き合っていくのでしょうか？

本作を通して、ご覧くださった方々が恋愛に限らず様々な立場や場面がかかる呪いというものから、時には解放される瞬間に会えることを想像しています。

岡田詩歌 (監督・脚本・アニメーション)

おかだ・しいか / 1996年生まれ、東京都出身。東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻の修了作品「Journey to the 母性の目覚め」が、PFFアワード2021審査員特別賞を受賞。第29回PFFスカラシップの権利を獲得して制作した、本作『恋脳Experiment』が、商業映画デビューとなる。



『Journey to the 母性の目覚め』

2021年/5分/カラー
 英題: Maternal Awakening
 監督・脚本・編集・アニメーション: 岡田詩歌
 音楽: 黒柳紗織 / 音響: 井関幸平
 出演: 川口真実、岡田和音、増田チカ、住吉美玲、岡田みずき

13 『バーバー吉野』

2003年/カラー/96分/35mm
 監督・脚本: 荻上直子

14 『運命じゃない人』

2004年/カラー/98分/35mm
 監督・脚本: 内田けんじ

15 『水の花』

2004年/カラー/92分/35mm
 監督・脚本: 木下雄介

16 『14歳』

2006年/カラー/114分/35mm
 監督: 廣末哲夫 脚本: 高橋 泉

17 『パーク アンド ラブホテル』

2007年/カラー/111分/35mm
 監督・脚本: 熊坂 出

18 『不灯港』

2008年/カラー/101分/35mm
 監督・脚本: 内藤隆嗣

19 『川の底からこんにちは』

2009年/カラー/112分/35mm
 監督・脚本: 石井裕也

20 『家族X』

2010年/カラー/90分/35mm
 監督・脚本: 吉田光希

21 『恋に至る病』

2011年/カラー/116分/hdcam
 監督・脚本: 木村承子

22 『HOMESICK』

2012年/カラー/98分/digital
 監督・脚本: 廣原 暁

23 『過ぐる日のやまねこ』

2014年/カラー/92分/dcp
 監督・脚本: 鶴岡慧子

24 『サイモン&タダタカシ』

2017年/カラー/83分/dcp
 監督・脚本: 小田 学

25 『猫と塩、または砂糖』

2020年/カラー/119分/dcp
 監督・脚本: 小松 孝

26 『すべての夜を思いだす』

2022年/カラー/116分/dcp
 監督・脚本: 清原 惟

27 『裸足で鳴らしてみせろ』

2021年/カラー/128分/dcp
 監督・脚本: 工藤梨穂



Invited Works

[招待作品部門]

あの時代を新しい視点でたっぴり上映

イカすぜ! 70~80年代





過 去からも、未来からも「ちえっ! イカすじゃねえか」と口惜しそうに、羨ましそうに、近くに、遠くに眺められる、あの時代。ぴあフィルムフェスティバル(PFF)の誕生、そしてだんだんと映画祭が形づくられていくあの時代。復興と闘争の50~60年代を経て、文化芸術に興味の高まり始めたあの時代、に焦点を当てる試みです。2028年の「第50回PFF」に向け、本年23年の70~80年代を皮切りに、24年=80~90年代、25年=90~00年代、26年=00~10年代、27年=10~20年代、と5年間で費やし、映画で半世紀をスケッチしていく試みです。

70~80年代。それは映画にとって大きな変革の時でしょう。映画黄金時代の終焉。映画会社の新規採用停止。自主映画からいきなり商業映画監督が生まれ、「自主あがり」という蔑称もあったと聞きます。映画監督のスキルが明確な時代に、助監督や脚本家としての経験を積むことなく「監督」に、というのは「商業映画」が厳然とある故に、より一層衝撃だったのでしょう。例えば今回上映する、『杏子』(77)、『ピリィ★ザ★キッドの新しい夜明け』(86)。ここでアメリカの『WANDAワンダ』(70)を挙げたのは、その年にまだ生まれていない鶴岡慧子監督です。

また、昨年、3人のPFFの歴史に刻まれる映画人が逝去されたことも大きな理由です。大森一樹監督、斎藤久志監督、日比野幸子プロデュー

サー。追悼だけで終わらない、彼らの革命と映画への情熱を伝えるプログラムを目指しました。その、日比野プロデューサーの人生を変えたのが鈴木清順監督『けんかえれじい』(66)だったことはよく耳にしました。本年、鈴木監督生誕100年を記念しての『陽炎座』(81)4Kリマスター完成をPFFでワールドプレミアできるのも嬉しい偶然です。

そんな、アートフィルム、アートシアターが拡がっていくのもこの時代。19歳での監督作『あみこ』(17)でベルリン映画祭の最年少招待監督となった山中瑤子監督を形づくった70~80年代の2つの作家映画も紹介します。そして、27年ぶりにPFFに戻ってくるアルノー・ドブレシャン監督は、『女囚701号 さそり』(72)を選びました。さらに、塩田明彦監督は、長年考え続けてきた相米慎二監督の映画が次世代に与えた影響について、3本の映画を上映後にレクチャーを行っていただきます。

「70~80年代」。このキーワードを多くの方に相談し、2週間の会期にあふれんばかりの時代の冒険を詰め込みました。時代を語るゲストも多彩です。この時代に生まれた映画、起こった出来事、それらが渦を巻いて、波紋を広げていくようなプログラム。どうぞお楽しみください。

PFFディレクター 荒木啓子



映画監督 大森一樹再発見

Rediscovering the Director KAZUKI OMORI

苗苗モリ・加ずき/1952.3.3-2022.11.12

大阪府出身。高校時代より8ミリ映画を撮り始める。京都府立医科大学在学中に初めて16ミリで撮影した「暗くなるまで待てない」で注目を浴び、自主映画ムーブメントの先駆けに。78年、城戸賞を受賞した「オレンジロード急行」で商業監督デビュー。その後、「ヒポクラテスたち」(80)、「恋する女たち」(86)、「ゴジラ」シリーズ等多多彩な作品を数多く発表。



大森一樹、 映画にまろうとした男



70年代後半。大森一樹の登場は日本映画界における事件だった。助監督経験もない20代の学生が大手映画会社から映画監督としてデビューしたのだ。映画ファン、そしてマスコミは若くてイキのいい新人監督の誕生に新しい胎動を期待し大いに盛り上がった。その作品『オレンジロード急行』(78)の予告編の冒頭。当時松竹の売れっ子監督だった山根成之氏がワイドショーのレポーターのように登場し「今、日本映画にとんでもないことが起きようとしています!」と叫んだ。バックには撮影中の大森監督。長髪、サングラス、首からはアングルファインダー。颯爽と「ヨーイ! スタート!」と吠える姿は、当時高校生、田舎の映画青年だった私の胸を熱くした。本当にカッコよかった。「こういう風にして時代は変わっていくのだな」という予感にゾクゾクした。

しかしそう簡単に時代は変わらない。『オレンジロード急行』の不入り。新しい風は吹かなかった。コケたのは作品の不出来のせいという声が映画雑誌に相次いで書かれた。大森一樹と自主映画の作り手たちは「時代の徒花^{あだばな}」のように言われた。しかし2年後。『ヒポクラテスたち』(80)で大森一樹は息を吹き返す。それはブームの風ではなく自ら起こした風だった。その後の大森は渡辺プロのオファーで「吉川晃司三部作」を撮る辺りで映画監督として重大な決断をする。映像作家という肩書きに別れを告げ職人としての映画監督に大きくかじを切るのだ。そもそも自主映画とは誰にも頼まれず、自らの表現欲求や衝動を糧にしてつくられるものだ。そこにはつたないながらも映画を撮った人間の「作家性」が垣間見え、そのことが作品の根幹であろう。しかし大森一樹は「出自」「作家主義」を否定し商業性にあふれた娯楽映画の職人監督としての道を標ぼうした。日本映画界のローテーションピッチャーとしてオファーがあればどこでも投げる、そして勝利をつかむ。80年代から90年代前半。時代の波長

との相性もよく大森一樹は最多勝投手並みの大活躍だった。自己の映画愛を武器に過去の映画へのオマージュ(インスパイアとか引用とかパクリとか色々言い方はありますが)で少年のように映画づくりを楽しんだ。インタビューでは「今回の映画の元ネタは〇〇なんですわ」と悪びれずに語り、自作を自画自賛した。それは思春期の頃、フジカシングル-8P1を片手にひとり神戸港に「007」ロケを見学に行き、回してしまう無邪気な幸福感と同じようなものだったのではあるまいか。とにかく映画をつくるのが楽しくて楽しくてしょうがない。その姿勢はプロになってからも変わらなかった。映画を撮ることで一歩でも二歩でも映画に近づこうとしていたのだと思う。だからどんなに職人監督を目指していても大森組の現場には「映画ごっこ」の精神が存在した。これは悪い意味で捉えてほしくない。ベルモンドが走り、ショーン・コネリーが銃を撃ち、マックイーンがバイクでジャンプしたスクリーンの向こう側に行く旅。あくまでも軽妙に。それこそが神戸っ子、大森一樹の信条だった。今回上映される8ミリ自主映画『空飛ぶ円盤を見た男2 銀幕死闘編』(76)のラスト。主人公は何も映っていない白いスクリーンの中に入ろうと何度も体当たりする。今私はこれを泣かずに観ることができない。これは大森一樹そのものだ。映画との距離を縮めるところか、大森一樹は映画そのものになろうとしていた。

2022年11月12日。大森一樹逝去。その監督人生は決して順風満帆ではなかったと思う。それなりの紆余曲折や苦悩は当然あったはずだ。作品歴を観ても90年代後半からは時代との齟齬^{そご}のようなものを感じる。果たして大森一樹は「映画になる」ことができたのだろうか。「映画史になる」ことはできたと思いますよ。大森さん。

緒方 明 (映画監督)

自主映画時代①8mm 6作品一挙上映

※8mm作品は全てデジタル化して上映：8mm

ゲスト：緒方明(映画監督)

聞き手：モルモット吉田(映画評論家)

🕒 9.10@13:00～小ホール

『革命狂時代』

8mm

1969年/モノクロ&カラー/13分/8mm



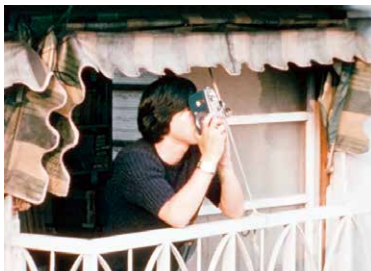
監督・製作・脚本・撮影・
編集：大森一樹
出演：森崎光一、園田靖夫、
浜田豊作、塔本晋也

六甲高校映研で文化祭上映用に初めてつくった8ミリ映画。まだ自主映画という言葉もない時代、大森が「ポスターやパンフ展示じゃ面白くない」と制作を提案。時代の気分を反映して「暴動映画」になっている。

『空飛ぶ円盤を見た男1』

8mm

1972年/パートカラー/13分/8mm



監督・脚本：大森一樹
撮影：上坂辰男
照明：稲垣博昭
音楽：根来秀明
出演：南浮泰造

「特撮なしのSF」を目指し、1日で撮られた習作。芦屋の大森の実家で休日にロケ。サイレントではあるが「物語を伝えようとする」点に映像作家としての成長が見られる。大森組の常連俳優・南浮泰造初主演!

『ヒロシマから遠く離れて』

8mm

1972年/モノクロ/2分/8mm



監督・企画：大森一樹
撮影・照明：山口 宏

二浪して京都府立医大に入学した大森は学校そっちのけで映画づくりに情熱を燃やし、毎月短編を撮った。その1本である本作は珍しい「前衛映画」で、ティッシュとインクだけで戦争のイメージを伝える実験作となった。

『空飛ぶ円盤を見た男2 銀幕死闘編』

8mm

1976年/モノクロ&カラー/19分/8mm



監督・脚本：大森一樹
撮影：上坂辰男
撮影協力：高木敬三
製作：冗談かんぱにー
出演：南浮泰造

「暗くなるまで待てない!」後、大森組のジャン=ピエール・レオこと南浮泰造を再び主演に迎えつくれた休日映画。技術も映画愛も前作から格段に進歩の跡が見られる。大森一樹を語る上で重要な作品の一つ。

『明日に向かって走れない!』

8mm

1972年/モノクロ&カラー/42分/8mm



監督・製作・脚本・撮影・
編集：大森一樹
撮影：上坂辰男、高木敬三
録音：根来秀明
出演：樋上一郎、米田未知子、
高木敬三、根来秀明、上坂辰男

別れた恋人に会うため走り続ける男。映画を使って「映画との距離」「映画への愛」を語る。「前衛と娯楽の合体。ゴダールとルルーシュの間を目指した」。ここからカメラが当時の最高機種ZC1000になる。

『空飛ぶ円盤を見た男3 エネルギーマン』

8mm

1981年/カラー/18分/8mm



監督：大森一樹
撮影：上坂辰男
製作・脚本：冗談かんぱにー
出演：南浮泰造

群像劇の快作『ヒポクラテスたち』後、ささやかに撮った定番空想科学シリーズ。ささやかながらお手製の特撮シーンもある。元ネタは敬愛する手塚治虫の「鉄腕アトム」。愛すべき小品佳作。

すべての作品解説 緒方明(映画監督)

自主映画時代②8mm+16mm 2作品

ゲスト：緒方明 (映画監督)

聞き手：モルモット吉田 (映画評論家) Ⓛ 9.10 @ 16:30 ~ 小ホール

『死ぬにはまにあわない!』

8mm

1974年/モノクロ&カラー/47分/8mm



監督：撮影：大森一樹
脚本：村上知彦、大森一樹
撮影：演出応援：中嶋啓介、高木敬三、南浮泰造
製作：零細プロダクション
出演：樋上一郎、田中厚子、上口正、西本知二、小山邦彦

他大学の女子学生から「私を主演に撮ってくれ」と頼まれ、初の物語映画、しかもノワールに挑戦。殺し屋、組織のボス、さすらいの女など虚構性たっぷりのハードボイルドがアクションと共に展開する。明らかに日活ニューアクションの影響で撮られた映画愛だけの怪作。

『暗くなるまで待てない!』

16mm

1975年/パートカラー/70分/16mm



監督：大森一樹
脚本：大森一樹、村上知彦
撮影：高橋 聡
音楽：吉田健志、岡田 勉、吉田峰子
製作：桃色遊戯
出演：稲田夏子、栃岡 章、南浮泰造、村上知彦、鈴木清順

大森一樹の名を一躍世に知らしめた初の16ミリ作品。日活ロマンポルノの企画公募に落選した脚本を基に自主制作で映画化。映画づくりに励む若者たちの喜びと哀しみ。ヒロイン不在で行われる完成試写で主演の南浮泰造がつぶやく台詞が胸を打つ。キネマ旬報ベストテン21位。

『夏子と、長いお別れ』

16mm

1978年/カラー/25分/16mm



監督・構成：大森一樹
台詞：大森一樹、村上知彦
撮影：渡部 眞
録音：木村 均
製作：文芸坐
出演：稲田夏子、南浮泰造、村上知彦、栃岡 章、西村 隆

鳴り物入りで監督した『オレンジロード』の悪評、興行惨敗の中、文芸坐出資で撮られた短編作。それまでの大森映画を総括するような内容がドキュメンタリーとフィクションを交えてつづられる。「俺の精一杯の『負けてへんで』宣言やな」。

必見! 秘蔵長編映画豪華2本立て

ゲスト：緒方明 (映画監督)

聞き手：モルモット吉田 (映画評論家)

Ⓛ 9.20 @ 13:00 ~

『女優時代』

16mm

1988年/カラー/93分/16mm



監督：大森一樹
原作：乙羽信子
脚本：新藤兼人
撮影：水野尾信正
美術：大谷和正
音楽：かしづち哲郎
出演：斉藤由貴、乙羽信子、根津甚八、森本レオ、小林桂樹



©KINDAI EIGA KYOKAI Co Ltd.

テレビという枠で映画史を描く。新藤兼人が自分と妻の乙羽信子の人生をつづった脚本を主演・斉藤由貴、撮影・水野尾信正という黄金の布陣で描いた隠れた傑作。大森一樹絶頂期の芽えまくる演出術が虚実ないまぜの新藤脚本と化学反応を起こした!

『悲しき天使』

35mm

2006年/カラー/113分/35mm



監督・脚本：大森一樹
撮影：林淳一郎
美術：丸尾知行
照明：磯野雅宏
音楽：山路 敦
出演：高岡早紀、岸部一徳、筒井道隆、山本未來、松重 豊

©ツイズジャパン

90年代後半から低迷期に入った大森一樹が、21世紀に入って起死回生の出来でその健在ぶりを見せつけたサスペンスの傑作。企画段階から公開まで次々にトラブルに見舞われ、観た人がほとんどいないというまさに幻の作品。岸部一徳と高岡早紀という意表をついた刑事パディが素晴らしい。すべての作品解説 緒方明 (映画監督)

映画監督

大森一樹再発見

Rediscovering the Director KAZUKI OMORI

いつもライバルとしておきたい。 大森一樹と森田芳光の時代



観たい映画がいつでも観られるようになった、と言われる。だが、そこでは同時代体験としての映画は見えてこない。例えば、「大森一樹と森田芳光の時代」とくっつけてみても、80年代を体験していなければ実感できないだろう。かくいう筆者も遅れてきた世代である。日本映画を観始めた80年代末には、すでに2人はメジャーの中堅監督だった。それでも、13歳の時——1991年に〈大森一樹と森田芳光〉を初めて意識したことがあった。この年、東宝で森田は『おいしい結婚』を、大森は『ゴジラVSキングギドラ』を撮った。付け加えれば、今井正、黒澤明、市川崑、鈴木清順、岡本喜八の新作が公開された年でもある。

巨匠監督たちと大森・森田の映画は強烈な個性を放っていた。ウェルメイドな世界を洒落な台詞で見せる森田と、アメリカ映画を恥ずかしげもなく引用し、ゴジラ映画を活性化させる大森。共に商業映画の枠組みに収まりきらない異物感が漂っていた。それが彼らの過去作を後追するきっかけとなり、初期作にさかのぼるほど彼らのスタイルが変わっていないことに気付かされた(今回上映される8mm時代の森田作品を観れば、そのことがいっそう明瞭になるだろう)。

商業映画の最初期作に、それぞれ医師と作家の卵を描いた『ヒポクラテスたち』と『の・ようなもの』を撮り、ATGで撮った『風の歌を聴け』と『家族ゲーム』を経て本格的にメジャー進出という似た経歴を持つ彼らの飛躍は、確かに「大森一樹と森田芳光の時代」だったのだろう。

だが、同時代の彼らの発言を拾っていくと、微妙なずれが存在する。城戸賞受賞作を自ら監督した『オレンジロード急行』は、大森にとって35mmフィルムで撮った初の商業映画になった。同じ年、森田は最後の8mmとなった『ライプイン茅ヶ崎』を撮る。この時、2歳下の大森の躍進に焦りを感じていたと森田は述懐する。3年後、自己資金で初の35mm『の・ようなもの』をつくった時には、大森はATGで『風の歌を聴け』を撮っていた。森田が追い付くと、大森はさらに一歩先へと進んでいく。

ところで、過去の記事を探しても大森と森田の対談が見つからない(存在するならご教示いただきたい)。森田が『家族ゲーム』を発表した直後、大森が対談を呼びかけたことはあったが拒絶されたという。「監督同士で喋り過ぎると……やっぱり嫌だと……『ぴあ』なんかも審査員を頼んだら断られたとか……。そういうポリシーがはっきりある人みたいですね」(『シナリオ』83年7月号)と、大森は戸惑いを隠さない。



「オレンジロード急行」撮影スナップ 岡田嘉子氏、嵐 寛寿郎氏と大森監督



珍しいふたりのツーショット



『の・ようなもの』制作時期の森田芳光監督

この件について森田は、「今の映画界の中で、映画監督をやっているなんていうのは相当に面白い奴ですよ。ということは当然友達になる。友達になったら毎日会いたいし、話したい。そうなるのが怖いんですよ。いつもライバルとしておきたいわけです」(『シナリオ』83年9月号)と理由を明かす。実際、2人はこのあとも、終生にわたって親しく交わることはなかったようだ。共同監督企画が持ち込まれた時に〈電話〉で相談したのが、初めての会話らしい会話となり、早々にやめることで一致したという。

それを踏まえれば、斉藤由貴を『おいしい結婚』で撮った森田は、大森の斉藤由貴三部作(テレビフィーチャーの傑作『女優時代』を含めた四部作でもある)を当然意識したに違いない。『シン・ゴジラ』を手掛けた樋口真嗣、尾上克郎が若き日に特撮を受け持った『未来の思い出 Last Christmas』も、大森がゴジラを撮っていた時代に、自分なら特撮をこう使うという森田からの返歌だったのではないかと。

大森自身は、「90年代以降、二人が相まみえることがない」(『森田芳光全映画』)と言うが、70~80年代、そして90年代以降も、ライバルではなく、「いつもライバルとしておきたい」関係が大森にとっても続いていたように思えてならない。

モルモット吉田 (映画評論家)

【参考文献】『シナリオ』「虹を渡れない少年たちよ」(PHP研究所)、「思い出の森田芳光」(キネマ旬報社)、「森田芳光組」(キネマ旬報社)、「森田芳光全映画」(リトルモア)

映画監督

齋藤久志再発見

Rediscovering the Director HISASHI SAITO

さいとう・ひさし / 1959.10.5 - 2022.12.17

東京都出身。高校在学中から8ミリ映画をつくり始め、『うしろあたま』がPFFアワード1985に入選。86年、第2回PFFスカラシップ作品『はいかぶり姫物語』を発表。廣木隆一監督『夢魔』(94)などの脚本や、塚本晋也監督『東京フィスト』(95)の原案などを務めたのち、『フレンチドレッシング』(98)で劇場映画デビュー。その後も『サンデイドライブ』(98)、『いたいふたり』(02)等、長回しのロングショットを駆使した意欲的な作品をつくり続ける。最新作『草の響き』(21)が雑誌「映画芸術」ベストワンを受賞。今後の活躍を期待される中、63歳で逝去。



『ふたつくり』頃

齋藤久志監督との出会いは、それぞれPFFで1985年だったか。私と齋藤さんで1号2号のベルトじゃなくて盾をいただいたことから始まった、いわば同窓みたいなもので、思い出してみると齋藤さんはそういう「同窓」みたいなものを大切に、社会構造も含めた人との繋がりをとても大切に人だったように思う。だから私のようなナラズ者にも分け隔てなく接してくれたのだろう。

当時は出品作の90%以上が8ミリフィルム作品であったと思う。

8ミリフィルムという媒体にはつくり手の呼吸がはっきりと顕れる。齋藤さんが亡くなったと聞いてから、わたしには『ふたつくり』という彼の8ミリフィルムの記憶がうっすらとまとわりつくようになった。

手元に年表がないのではっきりとは分からないが、それは『はいかぶり姫物語』の少しあとにつくられたはずだ。撮影が大変だったと話には聞いていたが、現場に行ったことはない。

90年代の半ばから、小川紳介監督亡きあとの小川プロダクションの事務所が伏屋博雄プロデューサーのご厚意で自主映画専用のダビングスタジオ兼編集室になっていた時期がある。ここで数々の低予算映画が生まれることになるのだが、このシンスタジオをプロ並みの日曜大工の腕でリフォームしたのが録音技師の鈴木昭彦氏で、『ふたつくり』は、まだその前身でやはり鈴木氏の自宅兼お手製スタジオ・ぼくんちにて仕上げが行われた。

その最初のオールラッシュの日に、わたしはそこへ行った。壁に貼った小さなスクリーンからあふれるつくり手の眼差し、呼吸。迷いながらも切実に何かを求めている。わたしは、たぶん2時間以上あったであろうその今生まれようとする映画を、息を吞んで観ていた。それから完成まで、時々お手伝いみたいなこともしたようなただ遊んでいたような？

今回、お膝元のPFFで「齋藤久志再発見」という特集上映が行わ



れると聞いた時、わたしは『ふたつくり』を無性に観たいと思った。

もうずいぶん昔のことなので細かいストーリーなどはすっかり忘れてしまった。しかし、アパートの階段の踊り場のようなところで、鈴木卓爾演じる男子が女子の片胸をぐわっと掴むシーンは、はっきりと覚えている。なんとも恐ろしくも切ない忘れられないシーンだ。

齋藤さんは、男の残酷さと甘えを描けばそれはもう秀逸な監督であつたのではないかと。

そしてもう一つ、忘れられないのはメカエルビス氏による音楽で、最後の希望のような明るいエンドロールのメロディーが今でもずっと頭に残っている。

今回の上映、念願の『ふたつくり』はデジタル化されていないため無理とのことだが、8ミリフィルムのデジタル化は紙やキャンバスに描かれた絵を印刷したみたいなものなので、ま、それも悪くはないのだけれど、でもいつかホンモノのオリジナル8ミリフィルムで上映されることを願って、この取り留めのないお話を終わりにします。

よろしい？

ね、齋藤さん。

風間志織 (映画監督)

“同窓” 2人のPFF入選作
『うしろあたま』

1984年 / パートモノクロ / 124分 / 8mm

8mm

🕒 9.14 14:30~



監督・制作：齋藤久志

原作：高野文子

脚本：岸田義孝

撮影：寺田裕之

音楽：村山竜二

出演：浅田美納子、岡本干都子、平田敦司

PFFアワード1985入選作。突然、髪を男のように短く切った女子大生の日々を淡々と描く。カメラ据えっぱなし、超長回しという独特のスタイルが早くも開花し、過去と交錯して反転する日常を鮮やかに捉える。

『草の響き』

2021年/カラー/116分

🕒 9.14 11:30~



©2021 HAKODATE CINEMA IRIS

作家・佐藤泰志の映画化シリーズ第4弾。心を病んで郷里に戻った和雄は、精神科医の勧めでランニングを始める。妻の出産を間近に控える中、地元の青年たちとも交流し、生活は安定したかに見えたが…。 “幸せ”の定義を覆す、大胆な脚色が見事。斎藤監督の早すぎる遺作となった。

監督：斎藤久志
脚本：加瀬仁美
原作：佐藤泰志
プロデュース・企画・製作：
菅原和博
撮影：石井 勲
出演：東出昌大、奈緒、大東駿介、Kaya、林 裕太

塚本晋也監督
presents 3本立て



『サンデイドライブ』

1998年/カラー/86分/16mm

16mm

ゲスト：塚本晋也(映画監督)
唯野未歩子(女優)

🕒 9.21 18:30~



監督・脚本：斎藤久志
製作：塚本晋也
撮影：石井 勲
音楽：金澤信一
編集：岡田久美
出演：塚本晋也、唯野未歩子、丹治 匠、中山舞衣、小野麻希子

※白黒スチルを使用していますが、カラー作品です。

レンタルビデオ店の店長・岡村とアルバイトの結衣。ただそれだけだった関係は、結衣が浮気した恋人を殺した夜に一変。岡村は秘かに思いを寄せる結衣のため、共犯者となる。あてもない逃避行の結末は？ 塚本晋也監督主演&プロデュース。

【スペシャルトーク】

斎藤監督の現場で出会った3人が語り、“秘蔵映画”をみせる

ゲスト：鈴木卓爾(映画監督・俳優・脚本家)
矢口史靖(映画監督)
田中要次(俳優)

🕒 9.14 18:30~



斎藤久志監督の映画に出演中の鈴木卓爾氏を訪ねたことで、矢口史靖監督、田中要次さん、3人の長い友情が始まった。秘蔵作品を上映し、数々のエピソードを披露しながら、斎藤監督の映画術を伝えていく。

同時上映『Whatever』

ワンピース* 1996年/カラー/11分



監督：斎藤久志
出演：唯野未歩子、塚本晋也

路肩に停めた車内で繰り広げられる逃亡中の男女の会話劇。画面を上下、左右にはみ出しさせて使う工夫に“外”の世界への想像が広がる。のちの『サンデイドライブ』制作に繋がった一作。

同時上映『DON'T LOOK BACK IN ANGER』

ワンピース* 1998年/カラー/16分



監督：斎藤久志
出演：鈴木卓爾、唯野未歩子、丹治 匠

1人の女性をめぐる、兄と弟の微妙な関係。2日間の物語をワンカットで成立させたアイデアが秀逸。セリフ以上に物語る、出演者3人の表情や動作、絶妙な間にも注目!

*「ワンピース」とは？

矢口史靖監督と鈴木卓爾監督の2人が、映画監督として歩き始めたばかりの1994年、「とにかく映画を撮り続けたい!!」と編み出したミニマル映画製作術。カメラは固定、1話ワンシーンワンカット完結、編集なしアフレコなしという制約を設けたことで創意工夫が生まれ、一連の作品群はベルリン映画祭でも上映された。これまで数々の監督たちが挑戦してきたが、今回は斎藤監督の手掛けた2本を上映する。

同時上映『〇×〇(ゼロカケルコトノゼロ)』

1983年/カラー/22分/8mm

8mm

ゲスト：風間志織(映画監督)、鈴木卓爾(映画監督・俳優・脚本家)



監督・脚本・撮影：風間志織
製作：かめさん
出演：佐野仁美、河上晶子、柴本真理、長谷川直子、宅間亜希子

風間志織監督のPFFアワード1984入選作。いつもと違う1日を過ごそうと街に出た2人の女子高生。

次々会う奇妙な人々の中で、彼女たちは自分たちの日常を発見する。当時高校3年生だった監督の圧倒的な感受性が躍動し、PFFスラシッププロジェクトの始まりに繋がる。

プロデューサー

日比野幸子再発見

Rediscovering the Producer YUKIKO HIBINO

ひびの・ゆきこ / 1946.9.15 - 2022.12.1

岐阜県出身。短大卒業後、高校の教師になるが、鈴木清順監督の『けんかえれじい』(66)に衝撃を受け上京。玄光社に入社、8ミリ映画専門誌『小型映画』編集部で多くの若い自主映画監督を誌面で紹介。また、『杏子』(77、伴睦人監督)、『九月の冗談クラブバンド』(82、長崎俊一監督)をプロデュース。PFFには立ち上げから関わり、長くアワード審査員を務めた他、海外招待作品部門のディレクターとしてアジアやヨーロッパの意欲的な作品を日本に初めて紹介した。

私が、PFFで企画運営する「UK90イギリス映画祭」に参加する際に、日比野さんが面談くださったことを思い出す。ふわ〜とした不思議な方という印象で、その後、国際交流基金からの派遣で東南アジア諸国のインディペンデント映画状況リサーチの旅をご一緒した際も、常に、ふわ〜と、しかし、静かに全てを見ている方という印象だった。ご自身のことは全く語らないので、周りから漏れ聞くところでは、

- ・伝説の映画雑誌『小型映画』の編集部におられた
- ・実験映画からドキュメンタリーまで幅広く評論活動、上映会活動をしてられた
- ・大島渚監督に自主映画を観ることを勧めた
- ・初期PFFの審査員として、高校生作家に注目していた
- ・映画の製作をしていた(今回上映する『杏子』もその一つ)
- ・アジア映画にいち早く注目していた(今回の2作も)
- ・「自主映画の母」と呼ばれている

といった、活動の幅広さ。

ベルリン映画祭に、「アンチ権威」としてシネクラブが設立した「ヤングフォーラム」*をとても尊敬しておられ、ヤングフォーラムの「あらゆるジャンルの映画の上映」「新人監督もベテラン監督もビジネスクラスでの招待」「映画祭上映作品の上映権利を取得し、ニュープリントを作成し所蔵」「それらのプリントを、所有する映画館Arsenalでその後も上映し続ける」などの活動を激賞し、絶対に参加するように、と、参加登録手続きをしてくださったものの、現地では完全別行動で「映画祭は個人の体験である」ことを学べたことも思い出す。

*現在、「ヤングフォーラム」はベルリン映画祭の一部門となっています。

90年代には、PFFを離れ子ども映画祭、アジア映画祭、女性映画祭を進めておられ、何でもとても「早い」ひとだな、映画祭の可能性を追求しておられるな、と感嘆している間に、御姿を見ることがなくなり訃報を聞いた。キネマ旬報2月下旬号に掛尾良夫氏がお書きになった素晴らしい追悼文で、初めて知ったことも多い。

今回、PFFで日比野さんが強く推しておられた映画の上映を、と当時を知る映画人にヒアリングや権利交渉をした結果、2作品と、デジタルリマスターが完成するプロデュース作品『杏子』の上映が実現した。大きなプログラムではないし、ご相談差し上げた多くの方が、日比野さんを語る言葉を探している最中であつたし、今回は、私の体験した、世界に向けた眼の方が中心になってしまったが、日比野幸子さんは、やはり「早すぎたひと」に思える。

あらゆる「映画」を発見、あるいはつくり、観せることの挑戦者として、子ども映画祭はじめ映画祭推進者として、そのインディペンデントな存在を研究するひとが、これから現れる予感がする。

PFFディレクター 荒木啓子



1981年審査員のみなさん



1984年、PFFプレフェスでの審査員によるティーチン



1987年、ベルリン映画祭「ヤングフォーラム」記者会見



1990年、「UK90」特集で来日したニコラス・ローグ監督と

迷子に合わせた『杏子』



公開されたのは45年以上前の1977年である。芥川賞作品が映画化されることと、パロコレのモデル山口小夜子が出演しているということが当時話題になったが派手な宣伝もなく、「ぴあシネマブティック*」として科学技術館地下ホールで上映された。プロデューサーは日比野幸子で、雑誌「小型映画」の編集者としての経験から若手監督を育て「自主映画の母」と呼ばれた。彼女はのちにPFFを誕生させた功労者でもある。監督・伴睦人は『カレンダー・レイクエム 黄色い銃声』(74)が話題になり、次の企画が『杏子』であった。

原作者・古井由吉はいまでこそ又吉直樹氏のような崇拜者を生んでいるが、絶妙な描写力と女人好みの幻惑する文体が特徴で、これを映画にすることは想像されなかった。果たしてでき上がった映画もドラマチックな躍動とは距離を置く作品となったがそれ故に印象に残る作品となり、小説にダブって記憶された。だが映画はその後「迷子」になって30年倉庫に眠ることになる。そして処分に困った

現像所がその権利者を探し、プロデューサーも気が付いた。そして運命的に撮影者であるわたしが色を整え、今日皆さまの前にお観せすることになった。今ここに杏子(石原初音)と姉(山口小夜子)が再び甦るのは偶然ではない。

渡部 眞 (撮影監督)

*ぴあシネマブティック(PCB)

1976年、自主映画監督や自主制作映画を応援することを目的にスタートした、ぴあ主催の上映イベント。第1弾は原一男監督「極私的エロス・恋歌1974」(74)、藤沢勇夫監督「バイバイ・ラブ」(74)。第2弾は、今回のPFFで上映する大森一樹監督の「ない!」シリーズ3作品と続き、これがPFFの礎となる。「杏子」は一般公開に先駆け1977年10月22日にPCB第10弾として、科学技術館サイエンスホールで2回上映され、好評を博した。

特報

東京会場では、デジタル化記念**来場者特別プレゼント**として、貴重な「杏子」公開時のチラシをご用意しました。

『杏子』 *デジタルリマスター版ワールドプレミア上映

1977年/カラー/80分

ゲスト: 渡部 眞 (撮影監督)

🕒 9.13*18:30~



監督・脚本: 伴睦人
原作: 古井由吉
製作: 日比野幸子、村上賢治
撮影: 渡部 眞
出演: 山口小夜子、石原初音、後藤和夫、真家宏満、絵沢萌子

※白黒スチルを使用していますが、カラー作品です。



山口小夜子主演、幻の映画がデジタルで甦る

古井由吉による、芥川賞を受賞した同名小説「杏子」の映画化。70年代、8ミリ作家が、芥川賞原作で16ミリ長編映画を撮ることは大事件だった! 研ぎすまされた感性の持ち主である2人の姉妹の心の軌跡を描く。

プロデューサー
日比野幸子再発見

Rediscovering the Producer YUKIKO HIBINO



日比野幸子さんと海外の才能

1980年代半ばは、ちょうど東京国際映画祭の立ち上げ時期で、世界一の賞金付きの「ヤングシネマ」部門のために新しい才能の発掘が直近の課題だった。ならば、とヨーロッパの映画祭を回り、映画関係者の協力で観た若手の新作についてのレポートを東京映画祭事務局に提出した。

「ヤングシネマ」の規定は厳しく、他の映画祭で受賞している作品は対象外になるため、応募資格を外れるものもあった。そんなことを日比野さんに話したら、PFFに紹介すればいい、と言ってくれた。

では、と85年にドイツの新人クリスチャン・ワグナー(招聘作品『フランツの自由』)を紹介。翌年はハンガリーのタル・ペーラを紹介した。タルはロカルノ国際映画祭で銅賞を受賞した『秋の暦』と共に来日。86年のPFF開催時、ハンガリーは社会主義体制だった。日比野さんは「彼が亡命しないようにね」と、私に注意。英語はできず、フランス語を少々話すタルだったが、東京が気に入ったらしくよく動き回った。新作の企画を持ってきていたので、日比野さんは黒澤明の映画も手掛けたHプロデューサーとタルとの面談を準備したが、ハンガリーで撮影する合作の製作費の安さは魅力でもテーマが暗いとのことHプロデューサーはすぐに引いた。『秋の暦』には欠けたルールがあり、タルが激怒。そこで大使館を通じて本国から至急取り寄せる。そうした一切を日比野さんが決断してきざぎざと指示を出す。

日比野さんは世界の監督を分け隔てなくもてなした。中でもアジ

アの監督たちへの熱い連帯は日比野さんがずっと持ち続けたものだ。韓国のイ・チャンホ(PFF84『寡婦の舞』)にペ・チャンホ(PFF86『赤道の花』)、インド人女性監督ミーラー・ナーイル(PFF86『インディアン・キャバレー』)、そして台湾のホウ・シャオシェン。韓国映画は今のような華やかさはまるでなかったが、『馬鹿宣言』で颯爽と登場したイ・チャンホは、『旅人は休まない』で力量を発揮し、3人の監督たちによるオムニバス映画『坊やの人形』(PFF84)が最初に紹介されたホウ・シャオシェンは少年たちの屈託のない日々を描いた『風櫃の少年』(PFF85/公開タイトル「風櫃から来た人」)で一躍、国際級の監督となった。

日比野さんはよく海外の映画祭にも出かけた。ベルリン映画祭で、児童映画部門の審査員を務めたこともある。PFFに招待されたワグナーくんが日比野さんとの再会をととても喜んだので、私も嬉しかった。ワグナーくんは初来日のために下準備をして、日本での活動費も持参していた。紙の博物館を訪ね、高野山にも行って日本文化を吸収。その手助けを私もしたが、「監督を大事に!」との日比野さんの考えに自然と私も染まったからだと思う。大いなる監督愛。いや、ちよつと違うかも。いつも日比野さんが言っていたことを思い出す。

「映画のためになることをしなさい」。

田中千世子(映画監督/映画評論家)

『風櫃の少年』

1985年/台湾/カラー/101分

🕒 9.15 15:30~



監督:ホウ・シャオシェン(侯孝賢)
原作・脚本:ジュー・ティエンウェン
製作・撮影:チェン・フンホウ
美術:チャイ・チェンピン
音楽:ジョナサン・リー
出演:ニョウ・チャンザイ、チャン・シイ、チャオ・パンジュ、チェンボージョン、リン・シウリン

ホウ・シャオシェンをエドワード・ヤンと共に世界的巨匠に押し上げた傑作。初めて自伝的な題材を扱った青春映画で、潮の香りに満ちた港町・風櫃で過ごす怠惰な日の放つ魅力に引き込まれる。1985年の第8回PFFで上映。

『旅人は休まない』

1987年/韓国/カラー/105分/35mm

提供:福岡市総合図書館 35mm

🕒 9.15 13:00~



監督・製作・脚本:イ・チャンホ(李長錫)
原作:イ・ジエハ
撮影:パク・スンベ
音楽:キム・チヨンフ
照明:キム・カンイル
出演:キム・ミョンゴン、イ・ボイ、コ・ソルボン

※白黒スチルを使用しています
が、カラー作品です。

『寡婦の舞』に続き日比野が招いたイ・チャンホ監督作品。1987年、第10回PFFで上映。3年前に亡くなった妻の遺骨を埋葬しようと妻の故郷へ向かう男の、祖国分断のために帰郷できない悲哀を描く。鮮烈な色彩も注目された秀作。

4Kデジタル完全修復版・ワールドプレミア上映! 鈴木清順 美学が炸裂

"Kagerô-za" 4K Premiere Screening

「一期は夢よ ただ狂え」 スクリーンに刻まれた過激な“遊び心”

誰が一体、最初にそう名付けたのか「清順美学」。無論のことながら、鈴木清順監督本人ではないことは確かだ。ともあれ名前のあとに唐突に「美学」の2文字を接続され、にも拘わらずこんなにも様になる人も他にはいないだろう。その多彩にして固有な作品群は観る者の斜め上、いや、下、前、後ろ、左右…異次元を駆けめぐり、国内だけでなく海外の名だたるシネアストたち——例えばジム・ジャームッシュ、ジョン・ウー、ウォン・カーウアイ、パワ・チャヌク、クエンティン・タランティーノ、デミアン・チャゼル等々から深くリスペクトされている。

が、そんな清順監督におよそ10年間も映画を撮れない時期があったのはよく知られていることである。組織のナンバー1の座をかけて、競い合う殺し屋どものノワールもの『殺しの烙印』(67)を発表後、1968年を境にして。なぜか? 1956年に日活で監督デビュー、いわゆるプログラムピクチャーのつくり手であったのだが、『殺しの烙印』を試写で観た当時の社長に「再三の注意を聞かず、鈴木はいつそうワケの分からない映画をつくっている」と断じられ、一方的に不当な解雇をされてしまったのだ。

だが社長を激怒させた、言葉を超えて脈打つ感覚の愉楽、そのエッセンスにこそ「清順美学」は宿っており、ファンはそれに熱狂し、支持していた(今もそうである!)。与えられた企画、脚本を咀嚼し、使い古された文法を崩す流儀は本名の“鈴木清太郎”でクレジットされたデビュー作、歌謡映画『港の乾杯 勝利をわが手に』(56)から散見され、カラーになると斬新な色遣いと独創的なショット、アナーキーなシーン繋がりがますます顕在化、『峠を渡る若い風』(61)や『野獣の青春』(63)といった逸品を生み出し、特に美術監督の盟友・木村威夫とタッグを組んでの自由奔放なアプローチは、『関東無宿』(63)、『刺青一代』(65)、『東京流れ者』(66)などで開花した。

よくあるジャンルムービーの顔をしているが趣向を凝らし、大きく傾き、歪めた時空間を大胆に、あたかも必然のごとく接続してしまう「清順映画」の魅力。例の約10年もの空白のあと、スクリーン復帰作『悲愁物語』(77)でもこれは健在で、というかアヴァンギャルドさに磨きがかかり、意外な仕事では人気TVアニメ『ルパン三世』第2シリーズ(77~80)の監修を途中から務めたりも。そしてカムバック後、「清順完全復活」を印象付けたのは、極めて蠱惑的なラビリンズ、「生きている人は死んでいて、死んだ人こそ生きているような」怪異譚の『ツイゴインエルワイゼン』(80)だ。本作は初の単独ロードショーを飾り、しかも従来とは違って完全インディペンデント製作体制



主演 松田優作と鈴木清順監督

で生み出されながらも、国内の賞のみならずベルリン映画祭で審査員特別賞を獲得! 日活時代は主にアクション映画を担ってきたが、本来の文芸志向が解き放たれ、内田百閒の世界の次は泉鏡花へ。観る者をまたもや夢幻の迷へとかどわかす『陽炎座』(81)を放った。主演の文士役、松田優作はあやかしの美しき女たちの愛憎の渦に翻弄されてゆくのだが、『夢二』(91)では沢田研二が画家「竹久夢二」に扮し、芸術家ゆえの苦悩に悶え苦しみながらも複数のヒロインとたゆんだ。この3本はのちに合わせて、「大正浪漫三部作」と呼ばれるようになる。

もちろん、「清順美学」だけが「清順映画」を表す言葉ではない。ミュージックであった野川由美子が素晴らしい『肉体の門』(64)、『春婦伝』(65)、『河内カルメン』(66)は清順式の傑作女性映画で、リリシズムがほとばしる。チャン・ツイーとオダギリジョー共演の遺作『オペレッタ狸御殿』(04)まで、絢爛たる“スター映画”をつくり続けてきた、とも言えよう。単に物語をつづるだけでなく常に過激な“遊び心”を共存させて。他界したのは2017年2月13日、享年93。「清順映画」の本質を端的に記すならば、座右の銘でもあった「一期は夢よ ただ狂え」——これである。

轟 夕起夫 (映画評論家)

『陽炎座』*4Kデジタル完全修復版

1981年/カラー/139分

🕒 9.21🕒13:00~



監督: 鈴木清順
脚本: 田中陽造
原作: 泉鏡花
製作: 荒戸源次郎
撮影: 永塚一栄
出演: 松田優作、大楠道代、中村嘉津雄、加賀まりこ、原田芳雄

謎の美女と出会った劇作家は、あの世ともこの世ともつかぬ世界で翻弄され…。

『陽炎座』『ツイゴインエルワイゼン』『夢二』4のKデジタル完全修復版は特集上映「SEIJUN RETURNS in 4K」として、11月11日より全国公開。

驚異のデビュー作

Astonishing Debut Films

『ビリー★ザ★キッドの新しい夜明け』 山川直人監督インタビュー

やまかわ・なおと／1957年生まれ、愛知県出身。早稲田大学在学中に制作した『ビハインド』が79年のPFFで入選。村上春樹の原作を基にした『パン屋襲撃』(82)など自主映画を撮り続け、『ビリー★ザ★キッドの新しい夜明け』で商業映画デビュー。主な監督作品に『SO WHAT』(88)『時の香り リメンバー・ミー』(01)など。

——『ビリー★ザ★キッドの新しい夜明け』は、ファッションビルや劇場を展開するパルコが製作した「PARCOMムービー」の第1弾でした。どうやって企画が成立したんですか？

パルコで初めて映画をつくるということで、当時の増田通二社長が森田芳光さんから何人か若い監督と会っていました。それで僕も会うことになり、喫茶店を舞台にしたワンセットの映画をつくりたいと提案したんです。

——セットが1つだけという映画は珍しいですね。

ヒッチコックの『ロープ』(48)など、ごくわずかしかなかったと思います。パルコが舞台中心のカルチャー展開をしていたから、面白いと感じてくれたのかもしれない。映画関係者にはとても驚かれました。「映画は色んな場面があって画づらが変わるからいいのに、何考えてんだ」と(笑)。

——作家の高橋源一郎さんが脚本に加わったのは、どんな経緯だったんですか？

僕は最初、自主映画の延長というか、PARCO劇場でやっている舞台のような数百万円単位でできる規模の映画を考えていたんです。16ミリの長編が撮れたらいいな、ぐらいの気持ちで。ところが、プロデューサーの森重晃さんに相談したら、「どうせなら35ミリの狙おうよ」と。そこからスケールが大きくなり、高橋さんに一緒にストーリーを考えてくれませんか、と依頼しました。高橋さんのデビュー作『さようなら、ギャングたち』がすごく好きだったんです。用心棒が店に集まる設定は、「一本筋の通った話があった方がいい。『七人の侍』をやろう」と高橋さんから提案してくれたんですよ。

——高橋さんは本人役で出演もされています。キャスト、豪華ですよね。

スクリーンで観ていた大好きな俳優さんたちが集まってきて、天国みたいな現場でした。話ができるだけでも嬉しいのに、僕の演出で芝居をしてくれるんですから。むしろ怖いぐらいで、最初はまともに喋れず、俳優さんたちの方から「話したいから来て」と誘って助かりました。話しに行くのも怖かったですけど(笑)。



——山川さんは早稲田大学のシネマ研究会出身ですが、デビューまでに何本ぐらい自主映画をつくられたんですか？

9本です。70年代に入って8ミリフィルムが音声と同録できるようになり、僕が大学に入る頃には“大学生になったら8ミリ撮って当たり前”みたいな空気がありました。16ミリより手頃とは言え、8ミリだって決して安くはなかったんですけど、一度つくったら面白くてやめられませんでした。当時は同世代の監督で、石井(岳龍)・長崎(俊一)・山川・黒沢(清)とひとまとめに呼ばれたりもしましたね。

——映画の何に、そこまで惹かれたのでしょうか。

何でもありの自由な表現をできるのが、僕は映画の醍醐味だと思います。例えば、『スローターハウス5』(72)という好きな映画があるんですが、主人公は第二次世界大戦中の過去、アメリカで大学教授をやっている現在、別の惑星で暮らしている未来を自由に行き来するんです。時制を自在に操るというのは、とても映画的ですよ。面白いなあと思って、最初につくった8ミリ映画の『ビハインド』(78)に取り入れました。

——『ビリー〜』もとても“自由”な映画です。西部開拓時代のアウトローが宮本武蔵と共闘したり、天井からバイクが降ってきたり！常識を吹っ飛ばされます。

天井からバイクを落としてみたり、店の壁の絵を途中でぬり替えているのは、画づらを変える工夫でもあります。ワンセットでつくる代わりに、どうやって面白くするか。そういう工夫を考えるのが好きなんです。あと、僕は『仁義なき戦い』シリーズの世代なので、掟破りへの憧れというか、どうせつくるなら変わったものをつくりたいという思いがあります。過去の映画のいいところを踏襲したり取り入れたりするのも大事だけど、どこかで一つ、これまでの常識をひっくり返したいんです。僕が映画にのめり込んだのは、鈴木清順や寺山修司、大島渚の映画を観て「こんなことをやっていいんだ！」と目を見開かれたからでもあります。『ビリー〜』を観て若い人たちにそう感じてもらえたら、何より嬉しいです。

聞き手・構成 近藤希実(ライター/編集者)



型破りなデビュー作までの軌跡2本立て

ゲスト：山川直人(映画監督)

🕒 9.13📍13:00~

『ビリー★ザ★キッドの新しい夜明け』

35mm

1986年/カラー/109分/35mm



監督：山川直人
原案・脚本：高橋源一郎
出演：三上博史、真行寺君枝、室井 滋、石橋蓮司、原田芳雄ほか

※白黒ステルを使用しています
が、カラー作品です。

荒野にたたずむ一軒の酒場。ギャングの襲撃から店を守るため、6人の用心棒が集まった。その顔ぶれは、ビリー・ザ・キッドに宮本武蔵、中島みゆき、合体人間マルクス・エンゲルス…ここはどこ？ 何時代？ などと問うなかれ。ゼルダの歌声が高らかに響く時、銃撃戦は始まる！

同時上映『ビハインド』

1978年/パートモノクロ/60分/8mm

8mm



監督・脚本・撮影：山川直人
撮影：沖山真保、市川淳一
音楽：黒川晶子
出演：伊藤清彦、室井 滋、石井葉子、川上博孝、石崎陽子

大学生の同棲生活を思わせるアパートの一室から始まるが、ドラマは瞬間に解体される。男女の物語の後景をまさぐるように、時間軸を自由に往還しながら連鎖する映像の断片…。何気なく通り過ぎてしまいそうな、後ろにあるもの、“Behind”が重層的に組み立てられていく。



鶴岡慧子監督セレクト 『WANDA ワンダ』

映画史を変え得た才能

これまで映画史において見過ごされてきてしまった女性の映画作家たちが、近年ますます再評価の波にある。例えばハンガリーのメーサーロシュ・マールタは中年期を過ぎて男性にも頼らず子どもを得ようとしたヒロインを、ドイツのウルリケ・オットエンガーは昼夜問わず酒を片手に酩酊状態のヒロインなどをスクリーンに描いた。知られざる女性の映画作家たちは、そうしてしばしば映画で描かれてきた主流のヒロイン像からは逸脱した女性たちに生を与えていた。バーバラ・ローデンの『WANDA』もまたその系譜上にあり、夫とも子どもとも別れて小悪党の男とあてなき旅に繰り出す主人公ワンダは、期待された映画のヒロインにはなり得ないほど何者でもない。ラストショットのワンダの表情が刮目に値するだろう。この映画は男女が銀行強盗を働いた実際の事件が着想源となっており、ワンダは著名な夫であるエリア・カザンの妻として扱われていたローデン自身が重ね合わせられている。ローデンは他の映画製作の資金を得ることもなく、『WANDA』ただ1作のみを残して、この世を去った。もしローデンが正当に評価されていたとしたら、映画史はきっと別の顔をしていただに違いない。

児玉美月(映画文筆家)

『WANDA ワンダ』

1970年/アメリカ/カラー/103分

🕒 9.16📍18:00~ 小ホール



監督：バーバラ・ローデン
出演：バーバラ・ローデン、マイケル・ヒギンズ、ドロシー・シュベネス、ピーター・シュベネス、ジェローム・ティアー

©1970 FOUNDATION FOR FILMMAKERS

片隅でかすかに瞬く一番星のような一作。バーバラ・ローデン監督・脚本・主演のロードムービー。世の中から塵のごとく扱われるワンダという人物を、〈監督の目〉と〈役者の身体〉の両極から、自らの内に集約して創り上げた彼女の先駆性と創造性は奇跡。

作品解説 鶴岡慧子(映画監督)

つるおか・けいこ/1988年生まれ、長野県出身。「くじらのまち」でPFFアワード2012グランプリ受賞。最新作『バカ塗りの娘』が9月1日より全国公開。

山中瑤子監督

『あみこ』への道

YOKO YAMANAKA; Before "AMIKO"

「映画監督とは作家なのだ!」と
知ったとき、『あみこ』の生まれる
土台ができた。



『ポゼッション』

1980年/フランス、西ドイツ/カラー/124分 9.9 12:00 ~ 小ホール



監督・脚本：
アンジェイ・ズラウスキー
撮影：ブルーノ・ニュイッテン
音楽：アンジェイ・コジンスキ
編集：マリー・ソフィー・デュビユ
字幕：岡枝慎二
出演：イザベル・アジャニーニ、
サム・ニール、ハインツ・ベネント、マルギット・カルステンセン、
ヨハンナ・ホーファー

夫が単身赴任で不在の間に変貌する妻。愛人を持ち、家庭を拒否し、妄想から狂気に落ちてゆく中、“魔物”が育つ。

観る人の数だけ解釈が生まれるような映画ですが、私はこれを究極の女性映画と受け取りました。ガンガン不貞を働き、のたうちまわろう。人生は一度きりだからこそ、後悔も失敗もまるごと抱えて絶叫していい! それで大丈夫。

『ホーリー・マウンテン』

1973年/アメリカ、メキシコ/カラー/114分 9.9 18:30 ~ 小ホール



監督・脚本・音楽：
アレハンドロ・ホドロフスキー
製作：アレン・クライン
撮影：ラファエル・コルキディ
字幕：岡枝慎二
出演：アレハンドロ・ホドロフスキー、
ホラシオ・サラナス、ラモナ・サンダース、
アリエル・ドンパル、ホアン・フェラーラ

「聖なる山」を目指す9人の男女。過酷な儀式に耐えた先に待つものは…。カルト映画ブームを巻き起こした一作。

外部の圧力によって進路に悩まされていた16歳の私には、劇薬でした。「映画が好きならこれを見た方がいい」とVHSを貸してくれた美術の先生、ありがとう。もしくは、余計なことしやがって。かもしれません笑。

山中瑤子監督作品2本立て

ゲスト：山中瑤子 (映画監督)

9.9 15:00 ~ 小ホール

『あみこ』

2017年/カラー/66分



監督・脚本・編集：山中瑤子
撮影：加藤明日花
録音：岡崎友理恵
音楽：大堀翔太郎
制作：高橋寿里
出演：春原愛良、大下ヒロト、
峯尾麻衣子、長谷川愛悠、廣渡美鮎

16歳の女子高生あみこは二ヒリスト。だがサッカー部の人気者に恋をして…。本作で、山中監督はベルリン映画祭に史上最年少で正式招待。

世界になじめず、全部敵! と切迫していた19歳の時に、あらゆるものを打破するためにつくりました。26歳になった今の自分には絶対につくれない、当時あのタイミングでしか生まれなかった映画です。

同時上映『おやすみ、また向こう岸で』

2019年/カラー/24分



監督・脚本：山中瑤子
撮影：戸田義久
出演：三浦透子、古川琴音、
中尾暢樹

恋人との関係に違和感を抱くナツキ。高校の同級生に再会し、ひよんなことから共同生活が始まる。山中監督初のTV作品。

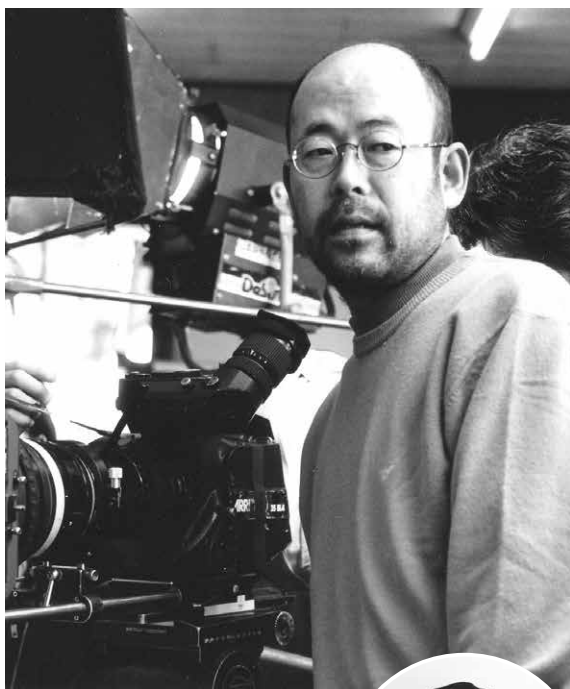
テレビの放映用に作りましたが、やることは映画の時と何も変わっていません。ぜひスクリーンで上映できたらと思っていたので、念願です。フランソワ・オソンのパカンス映画に触発され、このような形になりました。
すべての作品解説 山中瑤子 (映画監督)

塩田明彦監督がみつめる 相米慎二の少年少女

SHINJI SOMAI's "Boys&Girls"

そうまい・しんじ / 1948-2001

岩手県生まれ。日活の助監督を経てフリーになり、長谷川和彦、寺山修司などの現場に助監督として参加。80年、『翔んだカップル』でデビュー。翌年、『セーラー服と機関銃』の大ヒットで注目され、以降、『ションベン・ライダー』(83)、『台風クラブ』(85)などを発表。『あ、春』(98)でベルリン映画祭国際批評家連盟賞を受賞。長回しを多用した特徴的な演出で知られ、生涯に残した作品は13本ながら、あとの世代のつくり手に大きな影響を与えた。



少年少女映画の 魅力の核心とは何か。



彼ら彼女たちはいかに映画を生き、いかに“死”と出会うのか。その時、彼らに何が起きるのか。80年代から90年代にかけて、何本かの少年少女映画の傑作を撮り、一世を風靡した相米慎二監督の世界を、自作『どこまでもいこう』も絡めつつ考察する。

塩田明彦 (映画監督)

しおた・あきひこ / 1961年生まれ、京都府出身。立教大学在学中から自主映画をつくり始め、『ファララ』がPFFアワード1984で入選。1999年、初長編作品『月光の囁き』で第24回報知映画賞新人賞を受賞。同年公開の『どこまでもいこう』はナント三大陸映画祭審査員特別賞を受ける。主な監督作品に『黄泉がえり』(02)、『麻希のいる世界』(22)など。最新作『春画先生』が10月13日、全国公開。

少年少女映画 傑作3本立て

レクチャー：塩田明彦 (映画監督)

🕒 9.12 13:30~

『ションベン・ライダー』

1983年/カラー/118分/35mm



©1983 キティフィルム

監督：相米慎二
脚本：西岡琢也、
チエコ・シュレイダー
撮影：田村正毅、伊藤昭裕
出演：藤竜也、河合美智子、
永瀬正敏、坂上忍、
原日出子

いつもいじめられているジョジョと辞書、ブルースの中学生3人。今日こそ仕返しをと誓った時、当のガキ大将が誘拐されてしまう。救出のため中年ヤクザに協力する3人だが、いつしか暴力団の抗争に巻き込まれていく。

『お引越し』

1993年/カラー/124分/35mm



監督：相米慎二
脚本：奥寺佐渡子、小此木聡
原作：ひこ・田中
撮影：栗田豊通
出演：桜田淳子、中井貴一、
田畑智子、笑福亭鶴瓶

※白黒ステルを使用していますが、カラー作品です。

レンコ、11歳。両親が突然、離婚を前提に別居を始めた。戸惑うレンコは平和な日々を取り戻そうと、かつて家族で出かけた琵琶湖畔への旅を計画するが…。8253名の応募の中から選ばれた新人・田畑智子が鮮烈な印象を残す一作。

『どこまでもいこう』

1999年/カラー/75分/35mm



監督：脚本：塩田明彦
プロデューサー：
堀越謙三、松田広子
撮影：照明：鈴木一博
音楽：岸野雄一
出演：鈴木雄作、水野真吾、
芳賀優里亜、鈴木優也、安藤奏

郊外の団地に住む小学5年生のアキラと光一は無二の親友だ。しかし新学期、クラスが離れたことで新たな人間関係が生まれ、ふたりの仲にも変化が訪れる。思春期に向かう少年たちを等身大で描いたみずみずしさが光る。

[特別企画①]

生誕120年

小津安二郎の 愛したふたり

Directors Whom OZU Admired

120th ANNIVERSARY
OZU YASUJIRO

©松竹株式会社

小津がこころから愛し、尊んだ 清水宏と山中貞雄作品を上映し、小津スピリッツを伝承する。

本 企画のきっかけは、神奈川近代文学館で開催された「生誕120年 没後60年 小津安二郎展」(2023年4月1日~5月28日)だった。閉展間近の夏日に駆け込み、膨大な資料でつまびらかにされる小津安二郎監督の生涯をたどる。8ミリフィルムに残された、脚本家・野田高梧とのプライベートショットや、松竹作品での予告編制作時に写る演出中のショットに、「実在の人物だ~!!」感が迫り、幼少期からの手紙や記録から、映画監督になりたくてなりたくて、何度も挫折しながら、夢を追っていった軌跡が胸を打つ。1903年生まれ。まだ映画が怪しい産業の影をまとった時代の少年が憧れた映画の世界。会社組織も曖昧、入社試験もなく、学歴も関係なく、でもそこに行くにはどうしていいのかわからず、映画ファンとして映画雑誌に投稿したり、映画同好会をつくったり、という記録がまぶしい。

そして思った。「これ、現代の自主映画状況と同じだ」

小津監督のみならず、映画の歴史と重なるような生涯を送り、映画を盤石なビジネスにと技術を次々と編み出し、経験を積み重ね、映画黄金期を支えた映画人たちの、その始まりは、自主映画と同じ。そして、そういう「映画を生みたい」人たちのために、およそ90年前に「映画祭」は生まれたことを、改めてかみしめる神奈川近代文学館での一日となった。

というわけで「小津生誕120年」に湧く今年、PFFは、同様に映画

に憧れ、勃興期のその世界に飛び込んだ、小津が深く敬愛したふたりの監督を、プログラムしたいと考えた。24歳で監督デビューした小津同様、映画に夢中で若くして活躍を始めたふたり。同じく生誕120年を迎えた清水宏監督と、あまりにも惜まれる28歳のその生涯を戦地で閉じた山中貞雄監督だ。若き日に、倦むことなく語り合ったであろう彼らの姿は、時代を超えて今も、そこに、ここに、多くの若者に重なって見えてくる。

PFFディレクター 荒木啓子



日本映画監督協会設立集会にて

清水 宏

1903-1966

しみず・ひろし／松竹蒲田にて2年足らずの助監督経験を経て、1924年オリジナル作品『峠の彼方』で当時としても若い21歳の監督デビューを飾る。1933年までに85本のサイレント映画やサウンド映画をつくったが、現存するものは少

ない。33年の『泣き濡れた春の女よ』がトーキー第1作となりその抒情性が高く評価されるが、同時期の『大学の若旦那』シリーズのモダンさと軽妙なリズムが特に好評だったという。戦後は、松竹以外の会社でも監督業を続けながら、戦災孤児を引き取り『蜂の巣映画』として独立プロを設立。子どもたちの親探しも意図したロードムービー3作品を制作。“自然”を愛し子どもや素人を配役することを好んだ巨匠は、軽々と映画を生み出し、多くの映画人に天才と呼ばれていたという。生涯163作品を監督し代表作は数あるが、現在観ることができる作品では、子どもの演出力の高さを知らしめる『風の中の子供』、愛する旅と温泉を道具に軽々と振り上げたかに観える『按摩と女』『替』、没落の風景を淡々と描く『小原庄助さん』そして、今回の上映作品などがある。



山中 貞雄

1909-1938

やまなか・さだお／京都に生まれた17歳の山中貞雄は、どうしても映画監督になりたいと、同窓のマキノ雅弘を頼ってマキノプロダクションに入るものの、カメラの横を動かす「地蔵」と呼ばれるほど役立たずの助監督として名を馳せる。その後、独立プロを立ち上げたスター俳優・嵐寛壽郎のもとに行き、書き続けた脚本を認められ脚本家として多くを提供。遂に嵐主演『磯の源太 抱寝の脇差』で22歳の監督デビューを果たす。短い生涯に監督した26作品は、いずれも傑作と言われてヒットを記録しているが、現在観ることができる山中作品は『丹下左膳餘話 百萬兩の壺』『河内山宗俊』『人情紙風船』の3作のみである。同時代の映画人と同じく、アメリカ映画を浴びるように観て、そのスピリッツと技術を京都での時代劇製作に導入し、常に驚きあふれる面白い時代劇を生んだという。小津や清水との交友、前進座との出会いから、東京へ移ることを決めた矢先、『人情紙風船』完成直後に召集令状を受け取り、中国戦線で戦病死するのは翌年だった。最もその死を惜まれる映画監督であろう。甥の加藤泰は少年時代から山中に師事し映画監督となった。



35mm 3作品一挙上映

🕒 9.19@14:00~

『有りがたうさん』

1936年/78分/白黒/35mm/with English subtitles



監督・脚色：清水 宏
原作：川端康成
撮影：青木 勇
録音：土橋晴夫、橋本 要
出演：上原 謙、桑野通子、
築地まゆみ、二葉かほる、石山隆嗣

当時は珍しいオール・ロケでつくられ、その「実写精神」が物議をかもした一作。南伊豆の山間を走る定期乗合バス。乗客に「ありがたう」と挨拶することから「有りがたうさん」と呼ばれている若い運転手が体験する一日。

『明日は日本晴れ』

1948年/65分/白黒/35mm



監督・脚本：清水 宏
製作：松本常保
撮影：杉山公平
音楽：伊藤宣二
出演：水島道太郎、三谷幸子、國友和歌子、日守新一、坂田源次郎

『有りがたうさん』同様、定期乗合バスに乗り合わせた人々のそれぞれのドラマが、バスの故障による山間での立ち往生により、さらに多彩に描かれる。2作を続けて観ることによって、戦前、戦後の日本の姿が浮かび上がる。

『人情紙風船』

1937年/白黒/86分/35mm/with English subtitles



監督：山中貞雄
脚本：三村伸太郎
撮影：三村明
音楽：太田忠
美術考証：岩田専太郎
出演：河原崎長十郎、中村翫右衛門、中村鶴蔵、山岸しづ江、霧立のぼる

歌舞伎の『髪結新三』を、長屋の住人が金持ちに対抗する明朗なドラマに改変した三村伸太郎の脚本から、現場で大幅に書き換えたという、山中らしからぬ暗さに死の予感を語る人も多い傑作。美術の素晴らしさにも注目。

[特別企画②]

20代監督の 衝撃作!

Stunning Films by Directors in 20s

新しい企画の始まりです。「20代監督の衝撃作」

19世紀末から20世紀初めにかけて、新しい産業「映画」には、10代が集っていた模様。20代での監督デビューもひしめいていた模様。そこから半世紀、20世紀半ばには、職業として、撮影所システムが構築され、「30歳までに」が他の表現、あるいは会社や組織同様「才能をはかるひとつの尺度」として語られ始める。日本やフランスのヌーヴェルヴァーグの起りもこの頃だ。その後、アメリカをはじめとして、映画学校の卒業生が鮮やかな活躍を見せ始める。そして現在、年齢が話題になる機会は少なくなった。だからこそ、あえて、焦点を当ててみる。若さの尽きぬ可能性に。

若さを生かすもの、それは、環境。若さに賭けることのできる場所。その場所が果てしなく拡がっていくことを願い、今年も2つの作品を上映します。

PFFディレクター 荒木啓子

『ジャンヌ・ディエルマン ブリュッセル1080、 コメルス河畔通り23番地』

1975年/ベルギー、フランス/カラー/200分

🕒 9.17 @ 15:30 ~ 小ホール



Collections CINEMATEK - ©Fondation Chantal Akerman

監督・脚本：シャンタル・アケルマン
 撮影：パヴェット・マンゴルティ
 美術：フィリップ・グラフ
 録音：ベニー・デスワルト、
 フランソワーズ・ヴァン・ティーン
 出演：デルフィヌ・セリグ、
 ジャン・ドゥコルト、
 ジャック・ドニオル＝
 ヴァルクローズ

25歳でこれを…世紀の傑作

昨年から全国で展開されている「シャンタル・アケルマン映画祭」でも、最も話題となる傑作。近年再発見されたと言ってよい。例えば、BFI(英国映画協会)が10年ごとに選出する映画ベストテン(『東京物語』や『市民ケーン』が常にトップ群に入っている)で、2022年末、1位に躍り出た。専業主婦のルーティーンに少しずつ亀裂の入る様を、定点カメラの観測のように見つめ続ける手法は、主演のスター女優デルフィヌ・セリグと、自らも被写体となり実験的な映画をつくり続けてきた若きシャンタル・アケルマンが、「フェミニズム」の視点から共に生み出した。日常的に最も視野に入らない専業主婦の仕事をカメラで記録する3日間の物語…と言われても想像がつかないであろうこの映画は「体験」するしかない。

Chantal Akerman / 1950-2015

©Jane Stein - Fondation Chantal Akerman



主な監督作品

- 1968年 『街をぶっ飛ばせ』※短編
- 1972年 『ホテル・モンタレー』※ドキュメンタリー
- 1974年 『私、あなた、彼、彼女』
- 1975年 『ジャンヌ・ディエルマン ブリュッセル1080、コメルス河畔通り23番地』
- 1978年 『アンナの出会い』
- 1986年 『ゴールデン・エイティーズ』
- 1989年 『アメリカン・ストーリーズ 食事・家族・哲学』
- 1993年 『東から』※ドキュメンタリー
- 2000年 『囚われの女』
- 2011年 『オルメイヤーの阿房宮』
- 2015年 『ノー・ホーム・ムーヴィー』※ドキュメンタリー

『わたしはロランス』

2012年/カナダ、フランス/カラー/168分

🕒 9.16 @ 14:00 ~ 小ホール



監督・脚本・衣装・編集：
 グザヴィエ・ドラン
 製作：リズ・ラフォンティエヌ
 撮影：イブ・ペランジェ
 美術：アン・プリチャード
 音楽：Noia
 出演：メルヴィル・プオー、
 スザンヌ・クレマン、
 ナタリー・バイ

23歳でこれを…驚異の映画

カナダ・モントリオールから突然現れた才能、グザヴィエ・ドラン19歳の初監督作品『マイ・マザー』(09)がカンヌに与えた衝撃は大きかった。次いで『胸騒ぎの恋人』(10)でその評価を確固たるものとし、3本目の長編映画が、本作『わたしはロランス』。初のフランスとの合作だ。カンヌ「ある視点」部門の女優賞とフィア・パルム賞を受賞している。愛し合う大学の講師ロランスと、映画制作のフレッド。性同一性障がい苦しんでいることを告白したロランスを理解し応援しようとするフレッドだが、様々な偏見と葛藤で変転していくふたりの年月を描く、まさに今日的な傑作。俳優としても活躍するドランが監督に専念し、主演のロランスを、デプレッション監督の新作でも光る、メルヴィル・プオーが演じた。

Xavier Dolan / 1989-

主な監督作品

- 2009年 『マイ・マザー』
- 2010年 『胸騒ぎの恋人』
- 2012年 『わたしはロランス』
- 2013年 『トム・アット・ザ・ファーム』
- 2014年 『Mommy マミー』
- 2016年 『たかが世界の終わりに』
- 2018年 『ジョン・F・ドノヴァンの死と生』
- 2019年 『マティアス&マキシム』





© 2019 Why Not Productions Arte France Cinéma

アルノー・ デプレシャン監督特集

Welcome Back! ARNAUD DESPLECHIN

Arnaud Desplechin / 1960年、フランス生まれ。短編『二十歳の死』(91)で注目を浴び、初の長編『魂を救え!』(92)以降、カンヌ映画祭の常連に。主な監督作品に『そして僕は恋をする』(96)、『エスター・カーン めざめの時』(00)、『キングス&クイーン』(04)、『あの頃エッフェル塔の下で』(15)など。新作『私の大嫌いな弟へ ブラザー&シスター』が9月15日より全国公開。

1992年の第15回PFF。『歩哨』というタイトル(公開時は『魂を救え!])で初長編作品を紹介。登壇したアルノー・デプレシャン監督は、シャイで繊細な並外れた映画青年だった。制作時に、黒澤明監督『赤ひげ』のことをよく考えていたという。え?

1996年、再びのPFF登場。『そして僕は恋をする』のヒットで人気監督の風格が漂うが、質疑応答での熱心な姿は変わらない。『二十歳の死』『魂を救え!』も合わせ3作品を上映。配給するセテラ・インターナショナルの深い愛情も記憶に残る。

そして本年、PFF3度目の登壇。自作4本の上映のみならず、『女囚701号 さそり』を語る時間も実現。同時に、東京日仏学院での完全レトロスペクティブと、その全国展開!! & ムヴィオラ配給の新作公開、と、まさに「デプレシャンの全て」を堪能できる秋がやってきた! …すぞくない? 書いてて驚く。

映画を愛する。そのことをひたすら突き詰めていくひとの熱量と、そんなひとを愛するひとの熱量が混ざり合い、映画のマジックを信じる時間と空間が、彼の周りに絶えず生まれている。時々、マーベルのドクター・ストレンジが思い浮かぶ。無敵だ。

PFFディレクター 荒木啓子

【特別707プログラム】

アルノー・デプレシャン監督『女囚701号 さそり』を語る

『女囚701号 さそり』

1972年/カラー/87分/35mm

ゲスト: アルノー・デプレシャン (映画監督) 9.17@14:30~



監督: 伊藤俊也
脚本: 神波史男、松田寛夫
原作: 篠原とおる
撮影: 仲沢半次郎
出演: 梶芽衣子、横山リエ、夏八木勲、渡辺文雄、扇ひろ子

※白黒スチルを使用していますが、カラー作品です。



恋人の裏切りで逮捕された女は復讐を誓い、憎悪うずまく女子刑務所からの脱走を企てる。大ヒット『女囚さそり』シリーズ第1弾!

女たちの復讐が、我々みんなの仇を取ってくれるから。まるで古代彫刻のように梶芽衣子の顔が謎めいているから。歌舞伎なのか、プレヒトなのか、何だか分からないが最高の演劇の伝統を受け継いでいるから。それでいて悦楽的なまでに背德的…。何よりタランティーノの『キル・ビル』は伊藤俊也のこの作品なしには生まれなかったから…女囚さそり万歳!

作品解説 アルノー・デプレシャン (映画監督)

アルノー・デプレシャン監督特集

Welcome Back! ARNAUD DESPLECHIN

あり余る才気を、小動物のような風貌の陰に隠すと

最初の取材は1996年10月、『そして僕は恋をする』を携えて2度目の来日を果たした時だった。今はなき千鳥ヶ淵のフェアモント・ホテルの一室で、ソファに浅く腰をかけ上半身を前のめりにして早口で答えてくれる様が小動物、齧歯目げっしゅもくのそれを思わせてなんだかとても微笑ましかった。そのくせいきなり「タルムードでは」なんて想定外の答えを突きつけ生意気な弟然とニマリしてみせる。思い返すと嵐の二宮くん(不謹慎な馴れ馴れしさを猛省しつつ、ついクン呼ばわりしたくなる可愛い感じもデプレシャンと共通——なんて、開き直ってしまおう)に“都会のねずみ”、デプレシャンに“田舎のねずみ”役をあてて共演させてみたかった——などと老婆の妄想はワイルドに膨らんだりもしてしまう。ものを言うのが不自由な昨今、“田舎”?! と非難の声が飛んでもきそうだが、ルーベというフランス北部の地方都市を出身地としてその映画の核心とし続けてきたデプレシャンには誇りを持ってパリへのおのぼりさん感覚を持ち続ける覚悟もあるのではないかしら、とさなる妄言を吐いたみた

い。実際、粋なパリっ子との違いの自覚が案外、デプレシャン映画に生息する人々の味わい深さの要なのではとも思う。

そう言えば『そして僕は恋をする』以来の分身のキャラクター、ポール・デダリュスと同郷の恋人エステルを軸に、前日譚とも続編とも名付けきれない時空でこまやかな物語を繋らせた『あの頃エッフェル塔の下で』の取材の折には、“青春の恋”を反芻しながら生の酷さと微笑ましさ、涙ぐましさとかいぐぐるポールについてこんなふうに述懐してみせた。「上京してきた田舎の子ポールは完全にパリジャンになってはいなくていわば亡命者のように暮らしている、まだ故郷を引きずっている。そんな彼の住みかもナイーブにパリだと判る場所にしよう、それでエッフェル塔の見える所になりました」

千鳥ヶ淵での取材から20年を経たその折にも前のめりの早口は健在で、こちらの質問を真正面から受け止め、いい加減にあしらうような真似はせず、判で押した答えでない何かを返してくれようとするその人柄の良さ、あり余る才気をやんわり齧歯目の風貌の陰に

『イスマエルの亡霊たち』

2017年/フランス/カラー/134分

ゲスト:アルノー・デプレシャン(映画監督) 9.16@14:30~



©Jean-Claude Lothar - Why Not Productions

劇場未公開

監督:アルノー・デプレシャン
脚本:アルノー・デプレシャン、
ジュリー・パール、レア・
ミシウス
撮影:イリナ・ルブチャンス
キー
出演:マチュー・アマルリック、
マリオン・コティヤール、
シャルロット・ゲンズブル、
ルイ・ガレル

天体物理学者のシルヴィアと恋仲になった映画監督のイスマエルは、外交官の弟をモデルにした映画を準備中。全てが順調に見えたが、そんな折、かつて失踪し、20年余りも消息を絶っていた元妻のカルロッタが、突然現れる。彼女の望みは何なのか。かつてのトラウマが甦り動揺したイスマエルは、撮影を中止し実家に引きこもる。一方、そんな彼を前にシルヴィアもまた、自身の人生を見直すことに。恋のトライアングルの行方がスリリングに描かれる。

イスマエル役のアマルリックを筆頭に、M・コティヤール、C・ゲンズブル、ルイ・ガレルといった人気スターが顔を揃え、2017年カンヌ映画祭のオープニングを飾った。

※カンヌでは短縮ヴァージョンを上映

『二十歳の死』

1991年/フランス/カラー/50分

ゲスト:アルノー・デプレシャン(映画監督) 9.16@19:00~



©Why Not Productions

監督・脚本:
アルノー・デプレシャン
撮影:エリック・ゴータイエ
美術:アントワヌ・プラト
音楽:マルク・ソメール
編集:フランソワ・ジェディ
ジェ
出演:ティボー・ド・モンタ
ンパール、ロシュ・レボ
ヴィッチ、マリアヌ・
ドニクール、ロラン・
コート

撮影監督や脚本家として下積みを経たデプレシャン監督の劇場用初監督作品。二十歳のパトリックが拳銃で自殺を試みて、病院に運ばれる。彼が生死の瀬戸際をさまよっている間、実家には家族が集合し、パトリックのことを理解しようと話し合いが始まる。だがそれによって、家族の中の秘め事や反目が次第に明らかになっていく。

デプレシャン監督にとって大きなテーマである家族が、悲観的なムードの中で扱われている。思春期の決別、人生の絶望がそっけなく語られ、鮮烈な印象を残す。1991年、カンヌ映画祭の批評家週間で開催され、同年、若手監督のユニークな才能を称えるジャン・ヴィゴ賞を受賞した。



「そして僕は恋をする」演出中のデプレシャン監督(左)

隠す奥ゆかしさにとっぴりと取材の時間に身を浸し続けたいような、めったにない心地良さを味わった。

「銀幕に映えるのはヒロインの勇敢さ、そして男たちの愚かさなんです」——そんな発言の真意を射抜くように決闘に臨むガンマン然と列車を降りて青い山を背に毅然と立った『キングス&クイーン』のエマニュエル・ドゥヴォス、壁に張り付いて身動きの取れない『クリスマス・ストーリー』のマチュー・アマルリックの姿が甦る。「人生はち

よっと過大評価されていると思う。多分、僕は人生から自分を守るために映画を必要としているんでしょう」。謙虚に語り大胆不敵に壮大な家族の樹の物語を紡ぐデプレシャン、最新作『私の大嫌いな弟へ プラザー&シスター』にはヌーヴェルヴァーグの弟分なんて肩書不要の実りが輝いている。そのまぶしさを素直に寿ぎたい。

川口敦子(映画評論家)

『魂を救え!』

1992年/フランス/カラー/139分

🕒 9.17🕒12:00~小ホール



©Why Not Productions

監督:アルノー・デプレシャン
脚本:アルノー・デプレシャン、パスカル・フェラン、ノエミ・ヴォフスキー、エマニュエル・サランジェ
撮影:カロリーヌ・シャンパティエ
出演:エマニュエル・サランジェ、ティボー・ド・モンタランベル、ジャン＝ルイ・リシャール、ヴァレリー・ドレヴィル

東西冷戦終了後の1991年を舞台にしたデプレシャン作品としては珍しいサスペンス・スリラー。軍に勤めていた亡き父のもと、ドイツで育ったマチアスは、医者勉強を終えるため、故郷フランスに戻ることにする。だが出国でトラブルに見舞われ、ルイと名乗る得体の知れない男から脅される。翌日、マチアスのカバンの中にはミラ化した男の首が入っていた。その日から、首の男の正体を突き止めることに取り憑かれた彼は、やがて国家の重大な秘密に関わるような出来事に巻き込まれていく。

ヒッチコック映画を連想させる、巻き込まれ型の妄執的な主人公を描き、高い評価を得た。

『そして僕は恋をする』

1996年/フランス/カラー/178分

🕒 9.22🕒12:00~



©Why Not Productions

監督:アルノー・デプレシャン
脚本:アルノー・デプレシャン、マヌエル・ブルデュー
撮影:エリック・ゴータエ
美術:アントワーヌ・プラト
出演:マチュー・アマルリック、エマニュエル・ドゥヴォス、エマニュエル・サランジェ、マリアンヌ・ドニクール

1996年のフランス公開時に、社会現象となるような評判を得て、デプレシャンの名前を世に知らしめた作品。30歳を間近にしても、いまだモラトリアム気分が抜けられない青年が、友人サークルの中の複数のガールフレンドの間を行ったり来たりする。主人公の、インテリだが優柔不断で女性に弱い部分や、学生から社会人へと器用に転身できないキャラクターが、同世代から共感を集めた。主人公に扮したマチュー・アマルリックは当時、映画監督を目指し俳優になるつもりはなかったものの、本作の演技が評価され、セザール賞の最優秀有望新人男優賞を受賞。デプレシャン×アマルリック・コンビの記念すべき1作目である。

すべての作品解説 佐藤久理子(文化ジャーナリスト)

ピーター・バラカン氏による音楽映画シリーズ ブラック&ブラック

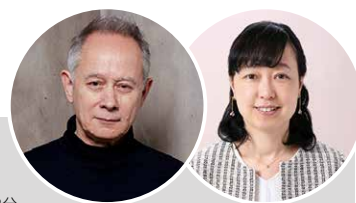
Black&Black

Black & Black企画は、BLM(=Black Lives Matter)が大きく注目されていた時に始まった。そもそも「大スクリーンで音楽映画を観る」というのは常に魅力的だと感じていた。そして「私たちはどこから来て、どこへ行くのか」という創作の命題を深掘りできると思った。人類も音楽もアフリカから始まったと言われるのだから。

企画5年目の本年は、1972年の“黒いウッドストック”、『ワッツタックス』が満を持して登場する。初回から交渉を続けていた本作が、ついに上映可能となったうえに、70~80年代に注目する本年のPFF企画にまさに合致する偶然、というか、奇跡。

二度の上映には、それぞれ、音楽の側面からピーター・バラカンさんが、歴史の側面から土屋和代教授が、アフタートーク。こちらも期待大!

PFFディレクター 荒木啓子



『ワッツタックス』

WATTSTAX

1973年/アメリカ/カラー/102分

ゲスト: 19日 **ピーター・バラカン氏** (プロドキャスター)

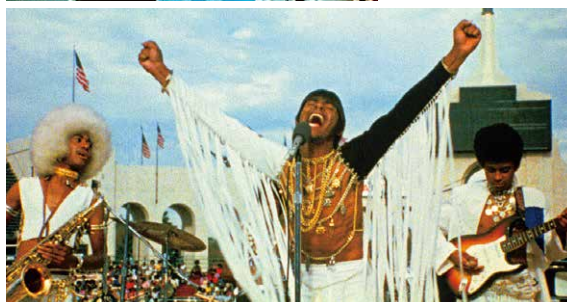
20日 **土屋和代氏** (東京大学教授:アメリカ現代史・黒人史・ワッツ/LAの歴史)

🕒 9.19🕒19:00~/9.20🕒18:30~



監督:メル・スチュアート
撮影:ロデリック・ヤング、ロバート・マークス、ジョゼ・ミグノン、ラリー・クラーク

字幕:石田泰子
出演アーティスト:アイザック・ヘイズ、ステイブル・シンガーズ、エモー・ジョンズ、ルーファス・トーマス、パーケイズ



©1973 Columbia Pictures Industries, Inc. All Rights Reserved.

“黒いウッドストック”と呼ばれた1972年の伝説的フェス。「ブラック・イズ・ビューティフル」が流行語だった1972年、ノリに乗っていたメンフィスのスタックス・レーベルがLAのスタジアムを征服。最先端のミュージシャンたちにも負けない客席のカッコ良さが大きな見どころの『ワッツタックス』はお祭りのつもりで見てください!

作品解説 ピーター・バラカン

Mel Stuart/1928-2012 アメリカの映画監督、プロデューサー。ドキュメンタリーからヒューマンドラマ、コメディまで幅広く手掛ける。ティム・バートン版とはひと味違う『夢のチョコレート工場』(71)、ケネディ大統領暗殺事件を追った『Four Days in November』(64)など、生涯で制作した作品は180本以上。

これまでのブラック&ブラック

Playback 2019-2022

2019

『真夏の夜のジャズ』

1959年/アメリカ/カラー/85分
監督:パート・スターン

『DOPE/ドープ!!』

2015年/アメリカ/カラー/103分
監督:リック・ファムイワー

『私はあなたのニグロではない』

2016年/アメリカ・フランス・ベルギー・スイス
合作/カラー/93分
監督:ラウル・ペック

2020

『ソウル・パワー』

2008年/アメリカ/カラー/93分/35mm
監督:ジェフリー・レヴィンヒント

2021

『ミカ・カウリスマキ/ ママ・アフリカ ミリアム・マケバ』

2011年/フィンランド/カラー/90分
監督:ミカ・カウリスマキ

『ミスター・ダイナマイト: ファンクの帝王ジェームス・ブラウン』

2014年/アメリカ/カラー/115分
監督:アレックス・ギブニー

2022

『ザ・ビッグ・ビート: ファッツ・ドミノとロックンロールの誕生』

2016年/アメリカ/カラー/90分
監督:ジョー・ローロ

ストリートと地続きの 革命的フェス

ワッツ地区。1965年8月11日、運転中の黒人青年マーケット・フライが白人警官に尋問され、助手席にいた弟、現場に駆けつけた母親と共に逮捕された。その様子を目撃していた人たちが蜂起、たちまち大規模な暴動へと発展し、7日間で34人の死者、1032人の負傷者を出し、逮捕者は3592人に及んだ。日々差別に直面する黒人たちの怒りが爆発した「貧困・放火・略奪」の光景は、アメリカ全土に住む多くの人にとってはテレビ化された (televised) 一種のスペクタクルとして映ったかもしれない。しかし現にワッツに住む黒人たちにとっては自らの生命を賭けた実力行使であり、それでも人々の状況はさほど改善するわけではなく、ニクソン政権下で切り捨てられるか否かの黒人ゲットーのリアルは続く。そんな中、暴動の犠牲者の追悼とワッツ地区住民への募金を目的として、毎年ワッツ・サマー・フェスティバルが開かれていた。そして1972年8月、スタックス・レコード全面協力のもとフェスティバルの最終日にロサンゼルス・メモリアル・コロシウムを貸し切り、スタックス所属アーティストを総動員する音楽イベントを開催するに至る。出演者はノーギャラ、入場料をわずか1ドルとし、収益はマーチン・ルーサー・キング病院などを支援するワッツ・コミュニティに寄付された。会場を埋め尽くす11万2000人の観客はほぼ全て黒人。「黒いウッドストック」として歴史に刻まれるこの伝説のコンサートを捉えたドキュメンタリーが、映画『ワッツタックス』である。

とは言え、いわゆるコンサート映画とは一線を画している。もしもこの映画を観て「演奏シーンが少ない」ことに不満を持つなら、ましてやブラック・ミュージックの愛好家を自認するのであれば、おそらく音楽との向き合い方をいま一度見つめ直した方がいい。テレビ化されたスペクタクルはたいいてい何かを覆い隠すことにより成立するが、この映画は幾人かのスターによるライブ映像だけでなく、政治・社会・宗教・愛・風俗・生活をめぐる市井の声を織り交ぜて構成されている。グラフィティーであふれる街並み、反骨精神がにじむ喋

WATTSTAX

Laugh! Cry!
Sing! Hear!
Feel! Dance!
Shout!

A soulful
expression
of the
living world...



STAX FILMS/WOLPER PICTURES Presents **WATTSTAX** starring ISAAC HAYES • THE STAPLE SISTERS • LUTHER INGRAM • JOHNNIE TAYLOR
THE EMOTIONS • RUFUS THOMAS • ALBERT KING and OTHERS • Special Guest Star RICHARD PRYOR • Produced by LARRY SHAW
and MEL STUART • Executive Producers AL BELL and DAVID L. WOLPER • Associate Producer FOREST HAMILTON • Directed by MEL STUART
From COLUMBIA PICTURES COLUMBIA PICTURES Original Score is available on STAX RECORDS R RESTRICTED
UNDER 17 REQUIRES ACCOMPANYING PARENT OR ADULT GUARDIAN
©2023 Columbia Pictures Industries, Inc. All Rights Reserved.

り方、痛烈なジョーク、頬を伝う一筋の涙には、一流アーティストのパフォーマンスに負けず劣らずの強度がある。まるでピクニックに出かけるように老若男女あらゆる人たちが集まったコンサートはあくまでワッツのストリートと地続きであり、実のところコロシウムの外(教会、床屋、公園、路上、等々)こそが闘争のアリーナであることを伝えてくれる。『ワッツタックス』は一部のソウル・ミュージックのファンだけに評価されて終わる「音楽映画」に留まるべきではなく、むしろ音楽について予備知識のない人こそ革命的な細部に目を向けることができるかもしれない。願わくばテレビ化されたスペクタクルとして傍観するのではなく、自らの問題としてどのように伝説を受け継ぎ、あるいはつくり変えていくかが、現代を生きる我々の責務ではないかと思う。自戒を込めて。

工藤 遥 (カンパニー社)